

政治の季節のある青春群像

職場における4・17半日ゼネスト、1964年



宮地 幸子

政治の季節のある青春群像

職場における4・17半日ゼネスト、1964年

朝7時半、香は仲間と3人で、広小路に面した10階建ての局社の前に立っていた。

青春の日にありがちな希望と虚ろの交錯、どんなに虚ろに暮れても、朝日に輝く春の街路樹を見ると気持ちが立ち直る気がした。

半年前、粉末ジュースの乾杯で大勢の仲間に祝福され、正志との新婚生活をスタートさせた香であるが、夫婦とも家賃3500円の安アパートへ帰るのが夜中の12時、近くの銭湯が閉まるぎりぎりに駆け込む毎日だった。神経質なくせに大雑把な性格は、いつも「いまが一番」と考えていたので、香の体からは幸せが滲み出していた。

そのとき、「このビラ読んでクダサイ！」アカ鬼のような形相で「クダサイ！」に力を込めて、執行委員の青山がビラを香にぶつけてきた。出勤して来た組合員の前で、組合執行部と共産党がけんかしながらビラを押し付け合う光景は、

まるで戦国時代の斬り合いのように、殺気さえ感じられた。

1964年4月17日、公労協（公共企業体等の労働組合約90万人）と交通運輸共闘会議（国鉄、私鉄、都市交通など約90万人）が中心になって、全国的に賃金引き上げを要求して、半日のゼネストを計画した。1960年代、未だ庶民の生活は貧しく、春闘は大幅な賃金の引き上げ要求が中心だった。全国的には総評が太田薫、岩井章という幹部中心にまとまり、職場毎に組合幹部のオルグがくまなく実施された。組合員も賃上げ要求では一致していた。

「ストライキといっても、世の中には組合もない人が大勢います。大企業の人だけが賃上げ闘争していても…」。

「そんなことを言っていたら何もできない。だから最低賃金制度の要求もしているんだ」。

香の素朴な質問に執行部はこう答えたこともあった。

職場委員の共産党員も組合員にきめ細かに働きかけ、オルグ参加状況もよく、オルグでの質疑も活発で、職場は静かな中にも引き締まって、4月17日にストライキに突入するのだというムードになってきていた。

ただ、職場のそのような雰囲気とは関係なく、共産党中央の発行する新聞「アカハタ」は、4月8日付けで『4月17日のストライキは賃金闘争一本で独占資本と闘おうとしており、アメリカ帝国主義と2つの敵と闘う姿勢がない。これでは労働者大衆を、弾圧と分裂の策略に身をさらさせることになる』と、いわゆる4・8声明を発表した。

それだけでなく、4月12日の「アカハタ」主張で、さらに4月14日付け「アカハタ」号外で、スト全体を反共的謀略と挑発的ストとして、全面的対決の姿勢を打ち出していた。

その頃、昼休みに同じフロアの同志辻峰子が、休憩室の片隅で「この小説読んで」と印刷物を香に渡した。

聞けば、書記長の田中が、どこかでその同人誌『青空』を見つけて、血相変えて怒ってきたという。短編なので香はさっと目を通したが、その小説は『書記長が職場活動家の原良江に近づいて、いい仲になろうとしている。かつて田中は、指導部の1人を党から引き離し、結婚までしたのに。これは組合活動を装いながら、不倫で、大きくなった党組織の攪乱をするのが目的である』というような内容の恋愛小説だった。

二人は小説の中身はいいとして、この小冊子を書記長はどこで手に入れたのか、そのことの方が問題だと言いつつ合った。

ときは「4・17スト」めがけて全国的に盛りあがっていた。活動家原良江は庶民的な感覚が豊かで、職場のみんなと心を通じ合える達人だった。赤旗読者をどんどん増やし、その中から真面目な職員がかなり党に入ってきており、期

待の新人だった。

党員作家で、実力派の辻峰子は直接原良江から抗議されたと、香に打ち明けた。「原良江は『私は真面目に組合役員として活動をし、書記長とも親密になった。書記長は奥さんなんかより、ほんとうに信頼しているのは私だ』と言ったが、その様子は尋常ではなかった」と話す辻峰子も緊張していた。

1年ほど前、書記長は共産党総細胞の指導部だった白井きくと恋仲になり、彼女は、仲間や地区委員会の時間をかけた説得に傾ける耳を持たず、離党していった。

「うしろ足で党に土をひっかけて去って行った」という地区委員会の指導によれば、書記長の出身地である渥美半島には、反党分子で有名な「みんぺい（杉浦明平）や、きよた（清田）」がいる。ましてや、社民幹部と共産党員の恋愛などもつてのほかと非難され、白井きくは職場も辞めてしまった。別の仲間の恋愛・

不倫事件のモデル小説と、共産党中央の『4・17ストは謀略と弾圧の危険がある』との「アカハタ」などの指導で、党総細胞は二重に混乱した。

1964年4月2日、総評は臨時大会を開いて、ストライキ態勢を固めていた。

香たち共産党組織も、ストライキ成功のために、組合の動員にも積極的に協力し合った。今度のストは、その規模から1947年の2・1スト以来のゼネラルストライキと一般に考えられていた。香は当時小学生だったが、2・1ストを当時のアメリカ占領軍に中止させられ、共闘会議の共産党井伊弥四郎が、涙ながらにラジオ放送で、『断腸の思い』で官公吏と教員の組合に中止指令を出し、国民に『一步後退二歩前進!』と言った有名な話を聞いたことがある。

スト決行の2日前、突然共産党地区委員会から連絡があり、「公労協が計画した4月17日のストは謀略の恐れがあるから、中止すべきである」と、夜、緊急に会議が開かれた。指導部は一樣に「信じられない」を連発した。あまりにも

唐突なスト中止指令だった。しかし、総細胞長だった香は、組織の一員として従わないわけにはいかなかった。

一方、正志は共産党地区常任委員として、国鉄労組の「ストを中止させる」指導に駆けつけていた。当然のように組合執行委員の共産党員から「謀略と挑発というけど、国鉄の現場にはそれらしい何もない」と猛烈な反対に遭っていた。

深夜になっても收拾の見込みがなく、あちこちで大混乱が起きていた。深夜帰宅した正志は香につぶやくように言った。

『これは党中央の決定だ。それに従え』と、“ご老公の印籠だ、頭が高い”式の言葉で混乱を押さえ込んだ。

国鉄の各細胞を、中央の方針に従わせようとすれば、そう言うしかなかっただろう正志の立場が、香には理解できた。

郵政関係の職場の混乱もひどかった。

共産党の「4・8声明」が出されてから、香の職場と同じように名古屋中央郵便局前で共産党員が、手作りのビラを配っていた。

組合幹部は、共産党によるストライキ妨害ビラと思い、ビラ配布を止めさせようと、あわててとんできた。読んでみるとそのビラには、ストライキ支持の立場が書かれていたので、その組合幹部は驚いた。

「共産党の『4・8声明』は誤りである。

第1に、労働者は賃上げを中心とするストライキの中でこそ『訓練され、結合され、組織される』という原則を忘れている。

次に、政党と労働組合、大衆組織とを混同している。『労働組合は社会主義の学校』であり、労働組合内での活動は重要である。

わが日本共産党中郵細胞は、労働者階級、人民大衆のために戦い続ける」

ビラの文章は理論的で、筋が通っていた。

このビラを作った人たちは、戦後レッド・パージを体験しどん底を味わった。共産党が分裂していた当時から、社会の革新を願い、苦勞して党活動を続けてきた。

安保入党党员と言われる香たち、60年安保闘争の中で党活動に参加し始めた者とは違って、歴史をふまえた思考が多面的な古い党员がいた。

香は、党勢力が急増した職場から、第8回大会代議員に選ばれた1人だった。綱領は満場一致で決まった。しかし、それ以前に、綱領についての意見は大きく違っていたことを知った。

その違いで多くの共産党から排除された人達がいた。その中に、安部公房、野間宏、杉浦明平ら21人の文学者たちがいた。そのことを真剣に考える時間もなく、何より宗教信者の思考を自ら疑う気もなかった。

香の職場総細胞指導部では、「謀略の恐れありと党中央が判断したのなら、それだけの根拠があるのだろう」となり、あつけないほど素直に会議を打ち切り、翌朝のビラ配りの態勢作りに話題を変えた。

香は、昨夜のことを反芻しながら、2人3人と出勤してくる職場の人に「おはようございます」と言いながら、ビラを手渡した。

ビラには『明日実行される予定の4・17ストライキは謀略の恐れがあり、実行したら労働者は甚大な被害を受けるので、共産党はスト中止を訴えます』とあった。総評と180万の労働者は、共産党の「スト中止・不参加」決定という直前撤退行為に出会い、涙をのんでストを中止した。

すべてはあのときから始まった。職場の共産党組織やサークル崩壊が。

誰に話しても、訴えても、共産党の主張は真剣に聞いて貰えなくなっていた。

「私は中庸でいきたい」。

「共産党はスト破りしたのではないの？」

「人間的にはみんないい人ばかりだけど、どれが正しいか分からない」。

ここ数年、職場の中を掘り起こし、創り出した政治的ムードが音を立てて崩れて行く。

盛況だった「三池守る会」も、「安保研究会」も「読書会」も、火が消えたようにしぼんでいった。

香は、書記長田中と三池守る会で協力し合った関係があり、その後も多発した職業病で田中は協力的であった。

また、アカ鬼のように怒り心頭だった執行委員の青山は、香の夫正志の高校時代、クラブ活動も同じ部の仲良しだった。

党員作家として期待され、後に「多喜二百合子賞」に輝いた辻峰子の、「4・17スト」当時書いたモデル小説は、事実と反していた。そのことが、大混乱に拍車をかけた。プロレタリア作家として、中央が、ストは謀略と言えば、それにそった作品を書いてしまったのではないかと、香は考えた。

それだけでなく、社会党主導の組合活動の中で、県段階の組合執行部として明快な指導力は県下一で、全ての組合員から信頼の厚かった共産党員の川辺保

が党を離れて行った。支部段階の組合執行部だった加藤豊も、原良江も、あのときを最後にみんな党を去ってしまった。

離党した人たちに共通していたのは、説得力ある大衆性と温かい人間味だった。そして、彼らは組合主義だとか、日和見主義だとか非難された。香は、そのことが何より切なかった。

組合の指導権は社会党が握り、社会党への献金も組合費同様、給料から天引きされていた。共産党は『この政治献金は政党支持の自由に反する』と主張し続けた。その結果、組合へ共産党支持と意思表示した者のみ、政治献金を免除するということになった。

香たち指導部は、多くの非公然の党員たちと区別して活動していたが、公然党員として、自ら共産党員と名乗り堂々と申請した。若い香にはそれが誇りでもあった。

『死んだ眼』という短編で、作者倉橋由美子は「60年安保闘争で国会突入した女子大生が殺されたとき、踏みつけられて失明という重症を負う主人公にこう言わせている。『逃げることを考えている。私の自由を、死さえ要求する政治のために提供しないことを』」。

香は、官側と組合双方からのアカ攻撃が、次第に激しくなってきたことを肌で感じながら、そこから逃げたいとは思わなかった。

社会主義社会になってこそ、人々は自由に生き、平等で幸せになれる。世の中が、封建制社会から資本主義社会に発展してきたように、次は社会主義社会になるのは、歴史的法則である。

香はその社会実現の運動をすることにこそ、生きる甲斐があり、青春をいかに生きるべきかの答えがあると信じて疑わなかった。それは、その思想を「絶対的真理」と宗教のように確信し続ける、マルクス、レーニン信奉者の姿であった。

「4・17問題」によって、公労協関係の職場党組織は、壊滅的打撃を受けた。

名古屋中郵細胞の中心的活動家3人に、共産党地区委員会から「除名」通告書が届けられた。日付は1964年6月22日とあった。

それは共産党による4・17スト破りの2カ月後であり、共産党が自己批判を公表する1カ月前だった。

あの大混乱から3カ月経った7月、共産党中央は、社会党、総評労働者の猛反発に遭い、「スト中止指令は誤りであった」という自己批判をした。

おわり

註

その後、共産党から除名された3人のうちの1人に偶然、直接取材の機会があった。「3人のうち1人は既に故人であった」

その取材によれば、共産党の自己批判公表後、3人を除名した愛知県常任委員会は3人に会い、次のような提案をしたという。

(1)、3人の除名は誤りだったから取り消す。

(2)、3人のうち1人を共産党県委員会専従、労対部長にする。

3人はその提案を欺瞞であるとして断固拒否した。